

質、特に仏教や禅に関する論文が多数ある。

クレスラーの功績として次の4点が挙げられるだろう。

第1は、日本の高等学校や大学で20年余にわたり教鞭を執り約5000人を教えたこと、第2は天野貞祐や吹田順助など同僚たちに助言を与え、彼らの研究や翻訳を支援したこと、第3に日本文化史や中江藤樹などの研究によりドイツの日本学の発展に貢献したこと、第4に今日のドイツ語圏で日本研究の拠点になっているボン大学日本学講座の基礎を築いたことである。

ターラント林科大学と鍋島直縄

子爵で後年貴族院議員になった鍋島直縄（なべしま・なおただ）は旧肥前鹿島藩の第十四代当主であった。1889年（明治22）5月6日に侯爵鍋島直大の二男として生まれた。兄は後の侯爵鍋島直映。直縄はのち明治30年4月鹿島藩先代の鍋島直彬（なべしま・なおよし）の養子となった。直彬は学を好み、文武の道を奨励し、維新の際は宗藩主鍋島閑叟を助け国事に奔走し功績があった。明治5年渡米して諸制度を視察して翌年帰国。その後侍従、沖縄県令、元老院議官等を歴任し、明治17年に子爵を授けられた。その後貴族院議員に当選すること数回に及び、また錦鶏間祇候を仰せ付けられた。日露戦争での功により勲二等瑞宝章を授与された。1915年（大正4）6月病没。

さて、鍋島直縄は1908年（明治41）東京外国語学校独逸語科本科に入学した。当時の同校の独逸語科には教授として山口小太郎、水野繁太郎の両大家に加えて、天才ドイツ語学者として知られた大津康がおり、それに助教授には外語始まって以来の秀才を謳われた気鋭の田代光雄もいた。文字通り当時の日本を代表するゲルマニストが揃っていた。それに加えて、ドイツ人教師にベルリン大学出のDr. Phil. ワルテルがいて熱心に学生たちを指導していた。こうした優れた教師たちに教えを受けた直縄は幸運だったと言えよう。そこで養成された語学力は必ずやドイツ留学に際して威力を発揮したであろう。ちなみに、同級には後年独文学者として活躍した道部順がおり、2級上には独語学者として盛んに活躍した粕谷眞洋や小柳篤二がいた。直縄は1911年（明治44）3月卒業し、その年の内に早くもドイツに留学している。はじめベルリンに滞在したが、直ぐにドレスデンに移り、1912年（大正1）10月16日から1914年（大正3）3月まで当時のターラント王立ザクセン林科大学（Königliche Sächsische Forstakademie zu Tharandt）に留学した。该校はドレスデンにほど近い小都市ターラントに1811年に創立されたもので、林科大学としては世界でも最も古いものの一つであった。現在この林科大学はドレスデン工科大学の林学科になっている。同工科大学の文書館には鍋島直縄の留学時代の資料が保存されている。それによると直縄は聴講生としてではなく、正式な学生として入学が認められそれは、入学に際してベルリンの日本大使館が発行した証明書に基づき、学長 Beck 教授、副学長の Martin 教授及び GroB 教授が入学を許可した結果だった。

直縄は3学期にわたって在学し、次のような講義を聞いたことが分かる。

1912年から13年に至る冬学期：Hans Wislicenus 教授（化学的森林技術、化学実習Ⅲ、煙

害)、Richard Beck教授(造林第一部、Franz Neger 教授(植物病理学)、Wilhelm Borgmann 教授(木材測定学、狩猟及び漁業学)、Reinhard Hegershoff 教授(測量学、測量実習、設計図)、Paul Schmuhl 講師(農学)

1913年夏学期：Friedrich Jentsch 教授(植民地林業) Arno GroB, 教授(森林利用)、R. Beck 教授(造林第二部)、W. Borgmann 教授(森林価値計算、木材測量学及び森林価値計算実習)、R.Hegershoff教授(林道建設)

1913年から14年至る冬学期：Heinrich Martin 教授(山林整備法／演習)、Heinrich Vater 教授(立地論／自然科学の部、鉱物学及び岩石学、土壤学演習)、F. Neger 教授(一般植物学／解剖学と生理学、植物学実習) Karl Escherich 教授(脊椎動物学、森林昆虫学第一部)、

筆者の手元には1912年から13年に至る冬学期の同大学の職員録(Personal-Verzeichnis)があるが、それを見ると、直縄が師事した上記の教授たちは当時のほぼ総ての正教授であって、私講師は四人いたがその内 P. Schmuhl の講義を聴いたことが分かる。

だが、直縄はこれらの科目は履修しただけで試験は受けなかったようであり、具体的な成績を記録した資料は残っていない。

鍋島直紹(なべしま・なおつぐ)の自伝によると、父・直縄は留学時代ターラント市の森林管理官宅に下宿していて、度々ドレスデンの街へ行き、またザクセン地方を旅行したという。

修了証書(Abgangs-Bescheinigung)は1914年3月13日付で発行されており、「日本の東京から来た華族の鍋島直縄は1912年10月より1914年3月まで当地の林科大学に学生として在学し、この間裏面に記載された講義と演習を申し込んだことをここに証明する。彼の品行について何ら問題にすべき点はなかった」ということが書かれている。そして最後に林科大学学長 Jentsch の署名がある。

ターラントを去った後、直縄は今度はミュンヘン大学の林学科において研究し、次いで欧米諸国を視察し帰国した。大正4年に子爵を授けられた。帰国後は佐賀百六銀行頭取となり、同14年貴族院議員に選ばれた。昭和4年司法大臣秘書官に任じ、同6年第二次若槻内閣成立とともに海軍大臣に就任。1939年(昭和14)4月29日、東京都渋谷区代々木上原の自宅で他界した。享年49。長男の鍋島直紹(明治45生)は戦後、佐賀県知事を2期勤めたほか、柿右衛門文様など焼き物の研究家としても知られている。また日本と旧東独との親善・友好のために尽力した。

『独逸語新階梯』著者 佐久間政一・大塚治雲

大正7年(1918)に南山堂書店より刊行された佐久間^{まさいち}政一・大塚^{じゅうん}治雲共著の『独逸語新階梯』(全94頁)は、当時のドイツ語の自習用・教科用図書として特に優れたものではなく、ごく普通の入門書である。それでも現在のものと比べると、習字を重視し、発音について詳しく説明している点など時代を感じさせる。

ところで此处で述べたいのは上記の本のことではなく、二人の著者についてである。共に出版当時五高のドイツ語教授であった。佐久間政一は知る人ぞ知るブックメーカーで、ドイツ語